

地 域 再 生 計 画

1 地域再生計画の申請主体の名称

神奈川県
相模原市

2 地域再生計画の名称

小学校統廃合の廃校利用を軸とした水源地域「藤野」の活性化構想

3 地域再生の取組を進めようとする期間

平成16年度から5年の期間

4 地域再生計画の意義及び目標

神奈川県内の水源地域では、都市部への人口流出による過疎化・少子高齢化が進み、地元農業の後継者不足などから、耕廃地の増加、森林の荒廃や地域活力の低下が見られる。この計画は、神奈川県と平成19年3月に相模原市と合併した旧藤野町が共同し、平成15年3月末に廃校となった旧篠原小学校を平成16年度に改修し、農業体験等グリーンツーリズム活動拠点として、地区住民の主体的な活動に資するために有効活用する取組みを水源地域の再生・活性化のモデル事業として位置付けた。

旧藤野町域（以下「藤野地域」という。）は、相模川の最上流に位置し、昭和22年に日本で最初の多目的ダムとして完成した相模ダムによって神奈川県民の水がめを守る役割を担っている。藤野地域は、総面積6,491haのうち80%以上にあたる5,244haを山林が占め、また、総面積の85.7%にあたる5,540haが集水面積となっている。



【藤野地域の風景】

水源地としての保安林が多いことから、開発規制が厳しく企業誘致などは難しいが、その反面、大規模開発が抑えられてきたことによって、豊かな自然と歴史的

風土が多く残っている。

藤野地域の人口は 10,839 人（H16.4.1 現在）であり、産業別 15 歳以上就業者数を見ると、昭和 35 年に就業者の 51.7%にあたる 1,943 人が第一次産業に就業していたが、以降、第一次産業の就業者数は下降の一途をたどり昭和 50 年には全体の 9.5%にあたる 351 人、平成 12 年には 2.4%にあたる 130 人となった。第一次産業に就業する者が減っていくと同時に後継者不足等により耕廃地が増加し、森林の荒廃が進むようになってきた。これは、神奈川県内の水源地域の傾向としていえることであるが、過疎化、少子高齢化が進むことで地域活力の低下を招いている。

さらに、近年、国内の町村部で問題となっている少子高齢化はこの地域においても深刻な問題となっている。また、藤野地域内の学校児童数の減少も著しく、平成 2 年から平成 15 年の 13 年間に 5 歳から 14 歳の子どもの総数は、1,545 人から 1,077 人へと約 30.3%減少している。この児童生徒の減少に伴い、中学校は既に 1 校に統合されているが、小学校の適正規模化を図るため、平成 20 年までに 10 校の小学校を段階的に 3 校に統廃合する計画を進めており、既に平成 15 年 3 月に南部地域の小学校 3 校を廃校とした。今後も統廃合を進めていくが、廃校となる小学校の地域にとっては、長い歴史と地域の伝統・文化を持ち、地域のシンボルとなっている小学校が自らの地域から無くなるという感情はとてつもなく大きく、そして心を傷つけるものである。そこで、統廃合に係る条件整備の一つとして廃校校舎等の跡地利用は地域住民の声を十分に反映させることとしている。

このような中、藤野地域の篠原地区（H16.4.1 現在 住民基本台帳人口 225 人、世帯数 90 世帯）では、地区内の過疎化・少子高齢化が深刻化しているにもかかわらず、地区内の中心的な施設で約 130 年の歴史がある篠原小学校が平成 15 年 3 月に廃校になったことから、この廃校校舎を活用した地区の活性化と賑わいの再生が地区の大きな課題として持ち上がった。篠原小学校は、明治 6 年に牧野村小学校が設置されたと同時に篠原支校として開設し、同 25 年に篠原小学校と改称された。昭和 53 年度には、公立学校施設整備費補助金により、



【旧篠原小学校】

公立小中学校危険建物の改築事業（補助金額 30,147,千円）、及び公立学校校舎の新增築事業（補助金額 16,428 千円）を実施し新校舎が落成したものである。

藤野地域では、昭和 61 年に「藤野ふるさと芸術村構想」がスタートし、創作の場を求めて移住してくる芸術家が多くいるが、篠原地区にも多くの芸術家や農業農村文化に興味がある人達が移住し、また、都市住民の往来が増加してきている。これまでに篠原地区では、地区住民の主体により、従来の地区住民と移住してきた芸術家や環



【芸術作品～語り合う石たち～】

境団体との協働によって集落を巡る「ぐるっとお散歩篠原展」という地区外の人達が訪れライフスタイルのレベルで触れ合い、地域間での価値の見直しを分かりやすく進めるユニークな手作り型都市農村交流イベントの開催や地区内の神社で「人形浄瑠璃」を行い、地域外から 1,000 人を超えるファンが集う一大イベントに成長させ、伝統的な文化を継承するとともに地域での新しい文化の創造を積極的に進めてきていた。また、里山生物として貴重種である「ギフチョウの保全」にも長年取り組んできており、里山環境の価値に対する地区住民の意識が非常に高い。

藤野地域では、これまでの篠原地区の住民の主体的な参加と連携による多様な活動を自らの力で地域経済の発展を図り、生活の活力と誇りを培う最も優れた取り組みとして高く評価している。このような中、平成 15 年 3 月の篠原小学校廃校に伴い、篠原地区の住民から廃校校舎を地域活性化の拠点として活用したいとの要望があったため、地域の活力を活かすことで検討・調整を行ったところ、旧藤野町が廃校校舎を再整備することとなった。さらに、篠原地区が整備後の施設の維持管理や施設を活用した事業運営を費用面も含め自らがを行い、地域の活性化を実現していくことで合意された。そこで、当初、運営主体が地区住民による組織であることから、「公立学校施設整備費補助金等に係る財産処分の承認等について（平成 9 年 11 月 20 日文教施第 87 号文部省教育助成局長通知）」を踏まえ公の施設を整備するため、平成 15 年 12 月に「藤野町立ふるさと学校の設置及び管理に関する条例」を制定し、篠原地区の住民による組織を「篠原ふるさと学校」の指定管理者とすることで調整を図った。しかし、住民福祉の向上の増進を第一義

的な目的とする公の施設であっては、地域資源を活用した都市農村交流と地域コミュニティづくりをする中で展開しようとする体験・研修、宿泊、施設に併設する喫茶・食事の料金設定に際して公益性が最優先し、地域の裁量や対応に制限がかかると同時に地域経済への波及にも制限がかかるおそれがあった。さらに、指定管理者はあくまでも公の施設の管理をするものであるため、篠原ふるさと学校として行われる体験・研修、宿泊、喫茶・食事の運営と当該学校以外における篠原地区全体の地域資源を活用して地区住民が行う都市農村交流の体験・研修の運営に一体性を保つことが難しく、地区住民による円滑な運営が損なわれるおそれがあった。しかし、「地域再生推進のためのプログラム」の別表1「10801 補助金で整備された公立学校の廃校校舎等の転用の弾力化」により、篠原地区の住民による組織への無償貸付を行うことができれば、取組みの一体性を保ちながら地区住民にある程度の自由な裁量を与えることができる。そして、藤野地域がまちづくりの一環として、篠原地区の取組みにおける事業展開や新規事業の企画・立案、市ホームページでの来訪者を募るための広報活動などの運営に携わることで、公益性を確保することができる側面を生み出し、事業の公益性と営利性の整合を取りつつ、利用者のニーズを的確に把握しながら料金設定を行うことができる。さらに、営利によって得た資金によって、市民農園の整備や地域コミュニティバスの運行などの新規事業を興すことが期待できるとともに、運営に係る財源の一部となっている地区住民会費の軽減や廃止、さらには地区住民の事業関係者への収益の配分などの地区全体の潤いに繋がり、指定管理者制度による運用と比較して地区住民の活力が向上し、より一層の地域活性化や地域経済の発展、地域雇用の創造に繋がるものと見込まれる。

今後の取組みの内容としては、篠原地区によるこれまでの個別の活動を連携させ、里山の伝統や文化・環境を守りながら都市住民との交流を深め、住民の生きがいと賑わいのある魅力的な地域を住民自ら創造するために、篠原地区の地域資源を活用し、都市農村交流と地域コミュニティづくりを旧篠原小学校を改修した「篠原の里センター」を中心に進めるものである。その拠点施設として、旧篠原小学校廃校校



【人形浄瑠璃】

舎及びその敷地、周囲の環境を活用し、単なる農村的、自然的な体験センターではなく、里山文化の伝承と創造を中心として、篠原地区の全域に分布する地域資源をサテライト（衛星）したエコミュージアムやグリーンツーリズムを展開し、来訪者が自然・農・文化に触れ、地区住民がインストラクターとなり体験学習プログラムを展開し、地区住民と来訪者の交流の場とするものである。また、新しいエコロジカルな暮らし体験や自然資源を活用した芸術的創作活動などを含めた研修交流施設としてのプログラムも展開し、宿泊的な機能も併設しているものである。その他としては、地区住民のためのむらおこし事業を地区住民が自ら考え、行動することによって取り組んでいき、子どもから高齢者までが憩える場所として、喫茶、食事が可能なパブ的機能を有し、土足でも気楽に立ち寄れる地区住民の団らんの場としての機能も有するものとしていく。

これらの機能を余すことなく活用し、地区住民の知恵と工夫による主体的な参加と連携による多様な活動を、神奈川県と相模原市で連携して公益性と営利性を取り混ぜながら有意義的に発展させることは、地区住民や来訪者の心を潤わせ、持続的な地域主体による地域活性化に期待できるものである。さらに、活動を持続させ来訪者が増すことにより体験・研修料、宿泊料、喫茶・食事による収益の増加や農産物や地元特産物を中心とした地場産業への波及効果も期待でき、持続的な地域経済の発展にも資することができる。さらに、篠原地区を広く発信し、東京に一番近い里山風景の残るふるさととして、相模川流域住民、都市住民に愛されるむらづくりに取り組み、より定住人口の拡大を図っていくものである。

5 地域再生計画の実施が地域に及ぼす経済的社会的効果

前記4で述べたように、これまで篠原地区では住民主体によって、地区内の文化交流活動として「ぐるっとお散歩篠原展」や「人形浄瑠璃」、里山環境活動として「ギフチョウの保全」を展開しているが、さらに地区の伝統技術としての「炭焼き窯作り」の都市住民との交流イベント、地域が一体となり都市農村交流における新しい地域の顔づくりとして「篠原地区の屋号」を個々の住宅に設置するなどを行っている。これらの取り組みは、地区住民が地域の



【篠原の屋号】

活力の低下と過疎化に対して最大の危機感を持ち、水源地域としての役割を考え、自らの地域を自らの力で再生しようとする表れである。いわば、篠原地区においては、地域再生力の土壌はできつつあるといえるが、これまで自分達が行い、そしてこれから考え、行動することに対して、神奈川県の水源地域の再生・活性化のモデル事業と位置付けされ、国、神奈川県、相模原市からの支援があるという心理的効果は図り知れない期待がある。そして、篠原地区の住民の自信・やる気・活力・誇りが、これから小学校統廃合を進めようとする地区の住民や水源地域に住む住民に対して、波及する効果にも大いに期待することができる。

篠原の里センターでは、都市農村交流の活用として 12 のメニューを計画しているが、そのうち、7つの体験・研修プログラムでは 1 プログラムあたり 1 回 20～50 人の受入人数を予定している。また、宿泊機能としては、1 日あたり最大 23 人の受入を予定しており、交流による体験・研修料、宿泊料、さらに施設に併設する喫茶、食事が可能なパブへの収益も見込まれる。“篠原”を全国に発信することで、都市農村交流の来訪者や交流以外の来訪者が増加することが予測できるが、篠原の里センターの直接的な収益だけでなく、地場産業の収益の向上も期待することができる。

6 講じようとする支援措置の番号及び名称

10801 補助金で整備された公立学校の廃校校舎等の転用の弾力化

7 構造改革特区の規制の特例措置により実施する取組その他の関連する事業

特になし

8 その他の地域再生計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

今回の地域再生計画は、相模原市藤野地域の一部である篠原地区の旧篠原小学校の活用を対象としたものであるが、この他にも廃校となった小学校を活用している事例が複数ある。

それらが単一に存在するだけでなく、篠原の里、他の廃校利用、ふるさと芸術村、公立小中学校、民間プロジェクトなどがネットワークとなり、地域と人を育む土壌を形成していくことを目指している。

別紙

1 支援措置の番号及び名称

10801 補助金で整備された公立学校の廃校校舎等の転用の弾力化

2 当該支援措置を受けようとする者

相模原市

3 当該支援措置を受けて実施し又はその実施を促進しようとする取組の内容

(1) 旧篠原小学校を活用した篠原の里センターの設置及び運営

篠原の里センターの運営形式は、公設民営とし、篠原の里センターの改修工事は神奈川県水源地域交流里づくり推進事業の補助を受け相模原市と合併前の藤野町が行った。施設活用の基本方針は、「地区住民の活用（地域コミュニティ）」と「都市農村交流での活用」の2つの活用を連携させたものである。



ア 地区住民の活用

地区住民の活用として、住民の文化活動をはじめとする子どもから高齢者までが気楽に集まれる常設の憩いの場としての機能等を基本とする。また、地区住民と都市住民の子どもや高齢者との世代間・地区間との交流にも活用していく。

地区住民の憩いの場としての機能等については、藤野地域にある篠原地区の自治会、老人会等の各種団体の長や役員などで構成する篠原地区振興協議会で運営を行う。

イ 都市農村交流での活用

都市農村交流での活用としては、篠原地区の全域に分布する地域資源をサテライト（衛星）としたエコミュージアムやグリーンツーリズムを展開するためのコア（核）としての役割を担う位置付けを基本とする。

篠原地区を訪れた来訪者が、篠原の自然・農・文化に触れ体験交流ができ、篠原地区の住民がインストラクターとなる体験学習プログラムを展開して

【「篠原の里」の看板】

いく。また、同時に新しいエコロジカルな暮らし体験や自然資源を活用した芸術的創作活動、ガーデニング学習などを含めた研修交流施設としてのプログラムを展開し、宿泊的な機能も併設していく。

都市農村交流に係る運営については、篠原地区振興協議会の下部組織であるNPO法人篠原の里で運営を行う。

篠原の里センターの運営に係る財源は、都市農村交流による体験・研修料、宿泊料、施設に併設する喫茶・食事による収益及び地区住民会費を基本とし、地区住民の活用に果たす運営及び維持に係る費用は篠原地区振興協議会が負担し、都市農村交流での活用に果たす運営及び維持に係る費用はNPO法人篠原の里が負担する。

1 地区住民の活用＜地域コミュニティ＞

＝篠原地区振興協議会による運営＝

- 文化活動の場としての活用
- 地域住民の憩いの場としての活用 等

2 都市農村交流での活用

＝篠原の里による運営＝

- 地域資源を活用した体験交流のコア（核）施設としての活用
- 体験・研修施設としての活用（篠原地区全域を活用）
- 宿泊施設としての活用



篠原地区の住民のインストラクター施設管理者としての活動

（２）篠原の里センターの改修整備

前記（１）のとおり篠原の里センターは、「地区住民の活用」と「都市農村交流での活用」の２つの活用を連携させたものであることから、都市農村交流の拠点でもあり、地区の生活拠点となる施設としての機能を持つ必要がある。そこで、次のことを基本的な考え方として、自然の豊かな地区での魅力を活かした改修整備としていく。

ア 既存の施設の有効活用

大規模な改修はしない。山の学校の雰囲気を残すために校舎の魅力と設備などを活かす。

イ 自然素材、地域素材の活用

改修に際して、床、壁、天井、家具等の素材は自然素材を活用する。地元の木、間伐材、土、竹などを活用する。

ウ 自然エネルギー活用の施設

体験交流テーマにエコロジーがあることから、自然エネルギーの活用を図る。また、神奈川県の水源地域での自然エネルギー普及地域としてのモデル的施設として機能させる。具体的には、ペレットストーブ等の活用でのモデル施設として整備する。特にペレットストーブは、神奈川県の新エネルギープランの中での木質バイオマス活用モデル地域として注目されている。

エ 地区内の伝統的な知恵と新しい芸術・環境的な知恵の活用

地区住民が持っている伝統的な知恵や技術を活かし、また、移住した芸術家や環境団体などの知恵や技術を活かして環境づくりを進める。

オ 参加・体験型での改修方法

外部の施工業者に任せるだけでなく、様々な範囲において地区住民、業者、芸術家等の多様な参加と都市住民参加のワークショップで改修を進める。

(3) 篠原の里センターの地区住民の活用計画

ア 文化活動の場としての活用

地域に文化・教育のひとつの拠点として親しまれてきた旧篠原小学校を文化の伝承・創造の場として活用する。

ここでは、地区内の高齢者達の伝統的な技術だけではなく、芸術家達の技術を活かした木工やクラフトなど地区住民の文化活動の拠点ともなり、かつ、地区内の若い世代がそれらの技術を学び都市農村交流の体験プログラムとして展開し、地区住民が指導者やインストラクターとして活用する場ともなる。

イ 地区住民の憩いと学習の場としての活用

子どもから高齢者までの地区住民が集える常設の憩いの場を創造する。喫茶、食事が可能な英国のパブ的機能を有し、外部空間の菜園（ハーブガーデンなど）や果樹園とも連携し、土足でも気楽に立ち寄れる室内空間とする。ここでの喫茶・食事は、地区住民の団らんの場であるとともに、一人暮らしの高齢者に対する給食又は共食的な機能の場としても展開していく。また、

パン釜を設置し、地区内の素材を活用した新しい料理開発や料理講習会なども実施し、地区内の食文化、食生活の改善を体験・学習する場も併せる。時には、これらの講習は外部に開かれるものとして、都市農村交流の体験メニューの一つとして大きなテーマとなってくる。

（４）篠原の里センター及び篠原地区全域での都市農村交流の活用計画

ア 田植え稲刈り体験・水車小屋体験研修

伝統的な稲作の技術に加え、EM菌を使用した農法など有機農法による稲作が展開されていることから、これらの技術を活かし、旧篠原小学校周辺の休耕地を使用した有機栽培による田植え稲刈り体験を展開する。そして、これらの収穫物を改修した水車で粉引きなどを行い、篠原の里センターの調理室で加工・食の体験を展開する。

イ 野菜作り体験研修

休耕地を活用して季節の野菜を作付けし、収穫する体験・研修を展開する。ここでは、田植え稲刈り体験に併せてごはんやおかずの材料である米や野菜が、だれがどこでどのように作っているかを都市の子どもに学んでもらうことを目的として展開する。

ウ わさび田体験

地区内の清流を活用したわさび田を開発整備し、その収穫等の体験を展開する。

エ ブルーベリー摘みと野草摘み体験

地区内の気候を活かしブルーベリー栽培を行い、摘み取り体験と料理体験を展開する。また、併せて野草摘みも行い、料理体験の素材として活用する。

オ ホタル観察会

篠原地区では、溪流に生息するゲンジホタルと農業環境に生息するヘイケホタルを目にすることができる。夕涼みをしながら環境条件の異なる場所に生息するホタルを観察し、生態系のあり方についての学びの場として展開する。

カ 冒険の森・原っぱ

旧篠原小学校が改築された昭和 55 年頃の航空写真を見ると敷地周辺は里山的な利用がなされ、豊かな農山村環境が展開されていた。そこで、篠原の里センター周辺を里山として再生し、食べられる果樹を植えたり、雑木林を使ったツリーハウスづくりや竹細工などを展開していく。また、薪炭林とし

て、木質バイオマス生産のモデルと位置付け、自然エネルギー利活用の研修会等を展開していく。

キ 炭焼き体験

前記カでの里山体験と併せて雑木林の維持管理の一環を踏まえて炭焼き体験を展開していく。ここでは、既に実施をした炭焼き窯作り体験や炭焼き・炭出しまでを体験するプログラムとする。炭を使用した風鈴などのアート制作から炭を使用した水質浄化など様々な炭の使用方法を体験・研修する。また、古来からの木質バイオマス利活用として自然エネルギーのあり方を学ぶ場としていく。



【炭焼き窯作り】

ク ギフチョウ観察と歴史文化・散策

里山に生息するギフチョウの生態の観察会と併せて篠原の歴史・文化を巡るウォーキングラリーを展開する。ここでは、地域に伝わる伝承や史跡・名所を紹介するだけではなく、地域に住む〇〇名人、隠れた匠を訪れ学べるプログラムを同時に展開していく。

ケ ぐるっとお散歩篠原展

毎年実施しているぐるっとお散歩篠原展を継続して行う。その際に、参加し、オープンガーデンなどをしてくれる参加者を増やしていく。

コ 旧篠原小学校改修ワークショップ

改修施工段階での壁塗りなどを珪藻土などエコロジカルな素材を使用することで参加体験型のプログラムとして位置付ける。これにより、エコロジカルな住まい（建物）のあり方を学ぶ場として展開していく。また、校庭及び周囲の緑の環境づくりによる整備作業も体験交流型のワークショップとして実施し、参加した都市住民にとっても篠原の里センターが自分達のものであるというアイデンティティを獲得してもらうことで、より愛着とリピーター性が高くなることを期待する。

サ 自然郷土料理講習・試食会

地区内の高齢者による郷土料理の講習会や地区内での新しい自然料理に

取り組んでいる人達、団体の協力によりパン釜等を活用した料理講習会や試食会などを実施する。

シ 自然・環境塾

地区内の有機農家、芸術家、環境団体等の協力により、知恵と教育力を活かした独自の学習プログラムにより、体験学習の場として活用する。その際には、篠原の里センター内や周囲の空間も活用する。

篠原の里センター 体験・研修プログラム

体験・研修	内 容	体験場	体験期間	受入人数	指導者
田植え・稲刈り （有機農法） 水車小屋体験	○一区画 250 m ² の 作付け体験のみ ○一区画 250 m ² の 体験のみ ○田植え、稲刈り をセットで行い精 米・・・5kg／人	篠原の里セン ター前体験田	○5 月中～ 6 月上旬 ○9 月下～ 10 月上旬	1 回 50 人	1 区画 2 名 指導者（地 元：農家）
野菜作り	○1 人 20 m ² の作付 け体験のみ ○1 人 20 m ² の収穫 のみ ○作付け、収穫を セット	体験施設畑	○4 月～ 9 月 ○6 月～ 11 月	50 人受入 可能	25 人に 1 人 指導者（地 元：農家）
ホタル観察会	ホタルの観察	○篠原地区沢 ○水田	6 月～ 7 月上旬	20 人受入 可能	20 人に 1 人
冒険の森・原 っぱ	里山・原っぱ作り 体験	篠原の里セン ター裏山	年間	人数の指 定なし	20 人に 1 人
炭焼き体験	炭焼き小屋作りか ら炭焼き体験まで	篠原の里セン ター裏山	11 月～ 3 月上旬	20 人受入 可能	10 人に 1 人
ギフチョウ観 察と歴史文化 の散策	○ギフチョウ観察 と山歩 ○歴史・文化旧跡 （伝説）を巡る	篠原地区全域	○早春 ○年間	50 人受入 可能	25 人に 1 人
旧篠原小学校 改築WS	地元の大工や芸術 家の指導のもと改 修	篠原の里セン ター	年間	50 人受入 可能	10 人に 1 人